

コ メ ン ト 1

大 西 昭 男 先生（関西大学 前学長）

それでは、大学教育の改善をというページを開けて下さい。ずいぶん手のこんだ、という失礼ですが、よくできた準備段階です。実情に関してもこれだけの準備段階が考えられるのに、私は今ここにやって参るのに準備段階なしでやって参りました。この間、電話でご用を承ってハイハイと安請け合いはいけないと思いながらも、まあ出たとこ勝負でいこうとやって参りました。

いつごろでしょうか、国立総合科学研究所が大学院化した時、それまでは研究だけだったのを、これから教育も承ろうという事になって、そこへ私が文部省の事務官の方と一緒に現地審査に参りました。だいたい、この文部省というところは1から10までシナリオを書いてくれるんですよ。「このように質問しなさい」と。こちらはよくその大学のことを心得たような顔をして次々と質問を出して、いかにも恐れ入らすことになっているんです。僕は、それがおもしろくないので、シナリオにないことからお尋ねしたんですよ。長倉三郎先生が所長でいらっしゃいました。全国に5か所ほどある研究所の全体の所長でいらっしゃった。その時、私は文部省のシナリオ外のことからまずぶつけたのであります。教育と研究のことです。今日のお話に関係があります。「長倉先生にまずお尋ね致しますが、今まで研究所で研究に専念してこられて成果を上げてこられたのに、やっかいな教育をやろうとおっしゃる、その考えはどういうことですか。文部省から出るお金は初年度7億円。設備増などはいらぬ。ということですね。しかし、学生を受け入れるということでそのメリット・デメリットはいかがですか」と。そうすると長倉先生は明解に答えられたんです。

「ここに文部省の方が来ておられるけれども、我々は研究補助者を要求してもそういう予算がない。我々研究者自身が、本当にあらゆるこまごました雑用までやらされている。そこで一つ学生を迎えたら手伝ってくれるんじゃないか」という本音をおっしゃったんです。ただし、昼食休憩の時に「あれはちょっと言い過ぎてね。内部からちょっとつつかれて、ちょっと言い足さないといけない」と言われました。何かといいましたら『『研究』』ということだけやっている、どうもおかしくなってしまう。やっぱり教育することで若い人達にぐるぐる循環することによって、研究も成果が上がるし、そしてまた教育面で貢献もできるんだ」と。最初は本音をおっしゃった後で、よく考えた上で模範答案をおっしゃったんです。それで私は後ほど草原審議官に、ここは研究の為の大学だ、研究に専念せよ、そしてここは教育の為の大学で、教育に専念せよ、と考えていらっしゃるのか、総合科学研究所あらため総合科学研究所大学院といったところには、実は教育は付け足しで、学生も実は大学院生もそのアシスタントである。予算が出せないで学生として配属したのである、研究に専念してくればそれで良いというお考えなのか。ここというところには、東大とか京大とかいくつかの大学には、一つ研究重点でどんどん予算を配分するのでよろしくやれというお考えなのかどうか。ここで私はむしろここにいらっしゃる先生方、ここに集まれた方、フロアーの方にお聞きしたいんです。私は自分とこの大学の先生たちを見ましてですね、いろいろ話をしておりまして感じますのは、一人のもれなく関西大学の教員は研究者として自認していらっしゃる。さて失礼ですがみなさん、ここに自分の手を上げたりして言う必要なくボタンを押したら何人かわかる、テレビでやってるでしょ、あれをしたらどうでしょう。自分は研究者であるかと答えて頂いたら全員になるんじゃないかな。で自分は教育者でもある、これも大多数の方がお押しになる。では自分は研究者でなしに教育者であると言うような方は、たぶんいないと思います。こういうことで教育と研究ということは、私はいい意味で分かちがたいと思うんですが、そうすると、私は学長として研究以外の仕事を先生たちにどんどん押しつけて教授会で反対されなかったことは一度もなかったのも当然だということになります。それでつい15年もやってしまったのですが、本当は2期ぐらいで片付くつもりが、5期にもわたってしまったのです。

さて私は、こういう京都大学高等教育教授システム開発センターができたことを本当に嬉しいことだと思います。教育ということについて一つ模範を示して頂けるんじゃないか。ここで所長さんにお聞きしたらいいのでしょうか。今日私がお聞きしても非常にためになったんですが、しかしここで、こんなことをうちわでぐるぐる回っておっても仕方がないんじゃないか。教育の大事さ、教育の方法の大事さということの普及についてまでお考えなのか、という

ことを所長にお聞きしたいのです。私ども関西大学では、一般教育研究センターというものが、もう十数年前につくられまして、そしていろいろな専門分野の先生が集まって、ちょっと自画自賛になるかもしれませんが、実に立派な一般教育についての研究をしていらっしゃる。こんなアンケート調査をして、これをこう分析していらっしゃる、なるほどなかなかいいなと思って、いつも感心しているんです。ところが、全学の教員はローテーションでそこに入っている時だけ、ガルバニズにかかっているカエルみたいに、侃々諤々と討論し調査し提言して、さて、そこを去ったら知らん顔です。そしてもちろん大方の教員がそういうことにはわれ関せず。一部分の先生たちが順繰りに一般教育研究センターでああいうことをやってくれるので自分たちは考えなくてもいいんだ、と。例えばそこでは、語学教育はこうしたらいいとか、ほかの大学に調べにいったり、いろいろと考えて、いい提案も出してくれてるんですが、全学的に、いや、一学部でも実行に移されたことがない。というようなことでして。さて、このセンターもそのようなならなければ良いのですが、という注文ということでお聞きしたわけでございます。教育と研究のことについては、また質問したいことがあるんですが、ただいまのところそれだけに絞ってちょっと教育と研究の問題について文部省も深く考えてらっしゃるのかどうか。また少なくとも京都大学単位でも、井村総長が「よし、やれ！」とバックアップされる気でいられるのはたいへんいいことだと思います。私どもの大学の一人一人の先生たちにも、それが普及してくることを私は望みます。